

まあな

日文の教育通信

未来になう子どもたちへ
日本文教出版

vol.02

2011年05月

未曾有の大災害の中で見た

共生・共助の江戸心

竹内 誠

江戸東京博物館館長



1

受け継がれていた
江戸の心根

火事を前提とした

2

江戸の備え

治世にこそ

花開いた江戸文化

3

教育は
家庭・地域・学校
が共に

4

人に寄り添い
自然に寄り添う

5



1933年、東京都に生まれる。文学博士。東京学芸大学教育学部教授、立正大学文学部教授などを経て、2002年、東京都江戸東京博物館館長に就任。徳川林政史研究所所長、東京学芸大学名誉教授。著書に『江戸社会史の研究』（弘文堂）、『寛政改革の研究』（吉川弘文館）、『江戸は美味しい「大江戸談義十八番勝負」』（小学館）など多数。

東京都江戸東京博物館
JR両国駅西口下車、徒歩3分。両国国技館の隣に位置する。1993年3月28日に開館。地震による空調設備等不具合のため、震災から4月末まで休館していたが、5月1日より全館再開となった。
〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1
開館時間：午前9時30分～午後5時30分
休館日：毎週月曜日
<http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/>
公式Twitter：@edohakugibochan

1 共生・共助

受け継がれていた江戸の心根

「困ったときはお互いさま。共に生き、共に助け合う。江戸の心根とも言うべき『共生・共助』の精神は、決して忘れられてはいなかったんですね」

3月11日、東日本大震災当日の日本人の姿が、海外メディアに賞賛されたのは記憶に新しいところだ。

竹内さんが館長を務める江戸東京博物館でも、即座に帰宅困難な方々の受け入れを決め、レストラン等を開放した。集ったのは100名ほどの老若男女。冷静さを失わず、礼節を重んじて助け合う姿に、竹内さんも感嘆したと言う。「例えば、電車の中だろうと構わず、百面相で化粧をしている女性。本人は美しくなろうとしているのに、その姿はまったく美しくない。近代的な個の確立をはき違え、利己的で、

他人のことを思いやれない日本人が増えている。嘆かわしいことだと思っていました」

そんな竹内さんの愁いも、この非常時の中で覆されることになった。

「おにぎり1つにしても譲り合い、より弱い立場の人へと手渡されていく。何も声を張り上げなくても、自然と列ができる。お年寄りをいたわり、幼児を優先し、女性を気遣う。緊急時にこそ人の真価が問われるのだと、あらためて思い知らされました。私が日頃感じていた現代日本人への失意は、日常の表層によるものだったんです」

長屋に象徴される、相互扶助の江戸精神。未曾有の大災害は、現代人の根底に流れる江戸の心を映し出した。

2 復興への道筋

火事を前提とした江戸の備え

数年に1度と言われる大火の頻度を数えるまでもなく、火事、地震、洪水、飢饉と、さまざまな災害を乗り越えてきた江戸市民。その復興に至るエネルギーはどこから生まれていたのだろうか。

「100万都市の大江戸は、7割が武家地で、寺社地1割。残る2割が町人地でした。町人が主に住まう長屋は人口密集地帯。木造のため火事に弱く、燃えれば大火になります。もちろん、広小路や火除け土手、土蔵や穴蔵など、防火の手だてもありました。しかし、江戸市民は防災よりも復興の備えに重点を置いていたんですよ」

町人の70%が貸家住まい。家主は、10年に1度は火事に遭う計算で不動産経営していたと竹内さんは言う。

「江戸の長屋は再建重視の構造でした。板葺きの屋根に下見板張りの俗に言う裏長屋は、焼屋造りと呼ばれていまし

てね。まさに火事前提の造りだったわけです。その上、家主たちはきちんと材木を確保していた。火事が起きてから材木を調達していたのでは再建に時間がかかるし、何より材木の値が上がってしまいますよね」

また、収納スペースのない長屋には物が置けず、たとえ火事で焼けても、町人はあまり財産を失わなかった。心が萎えなかったことも復興を速めることにつながっただろう。「そして、長屋の家賃は安かった。1～2日働けばひと月分の家賃が払えたんです。大工さんの日当が500文。二八そば、今で言う立ち食いそばが16文。夫婦に子どもの核家族が暮らせる広さの長屋は、ひと月1000文ほどで借りられました。江戸の人々は意外とあくせくしていなかった。余裕があったのです。江戸の豊かな文化も、そうした素地があればこそ花開いたと言えるでしょう」



田代幸春『江戸火事図巻』（所蔵：東京都江戸東京博物館）Image：東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

3 災い転じて

治世にこそ花開いた江戸文化

「1855年に発生した安政の大地震においては、地震に関する情報を記した刷り物が大量に出回りました。中でも多かったのは鯰絵です。とは言え、ナマズが悪者として描かれたものは決して多くはありませんでした。むしろ、災い転じて福となす日本人特有のユーモアをもって描かれた鯰絵が多かったんですね。復興景気で財をなした商人や大工がナマズに感謝する絵柄や、金持ちから市中に金が出たことに起因する世直しナマズの姿も見られます」

深刻な被害に遭った一方で、ユーモアを交えつつ復興の道を歩む江戸の人々。盛んだった出版が裏付けるとおり、江戸市民は当時の外国人が驚くほどに識字率が高く、また歌舞伎や浮世絵、花見や花火など娯楽を愛し、江戸の文化を謳歌していたのだ。

「昔は学校でも、江戸時代は身分制度が厳しく、鎖国が続いた暗黒の時代などと教えられました。しかし江戸の町人は、いろいろな制度やお侍さんたちと上手に折り合いをつけながら、日々、実に豊かに暮らしていたのです。そもそも200年以上もの間、内乱もなく平和だった江戸時代。もし暗黒の圧政時代だったとしたら、そんなに長くは続いていないですよ」

江戸時代がなければ日本の近代は始まらなかったと語る竹内さん。江戸から明治へ、近代化への道筋を滑らかにした江戸の文化水準の高さは、やはり乱世ではなく治世だったがゆえと言える。



『地震よけの歌』
〔所蔵：東京都江戸東京博物館〕
Image：東京都歴史文化財団
イメージアーカイブ

4 三位一体

教育は家庭・地域・学校が共に

「長い平和であればこそ、社会に出るまでに一貫した教育がなされた。その点も江戸の特徴ですね」

江戸では、家庭、地域、そして学校（寺子屋）が、三位一体となって子どもたちをはぐくんでいたと竹内さん。

「第一に家庭。まず『他人様に迷惑をかけないこと』を教えられます。誰にも迷惑をかけずに生きることは不可能ですが、何が迷惑かを知ることが生きる力につながります。第二に、地域では『人との付き合い方』を学びます。子ども同士の遊びの輪の中で、また、同じ長屋の大人たちに叱られながら、社会に出るための訓練をしていました。第三に、学校では『生きるための実践力』を身に付けます。いわゆる読み書きそろばんですね。社会で働くためのツールを得るわけです」

現在は道路が町の境界だが、江戸の町は両側町、すなわ

ち道の両側が同じ町だった。『向こう三軒両隣』がしっかりと機能し、その分、地域力も高かっただろうと竹内先生は分析する。

「寺子屋は識字率向上を図る上で大きな役割を果たしていましたが、子どもたちは皆、一朝一夕に読み書きができるようになったわけではないんですよ」

寺子屋の先生は常に尊敬される存在であったものの、すべての生徒が先生の言うことをよく聞く優等生だったわけではなかったと竹内さんは笑う。

「いつの時代にも、やんちゃ坊主というのはいるものでね。先生が悪戦苦闘していた様子が書かれた日誌のようなものが残っているんですよ。『文吉少年は今日も寺子屋中を走り回っていた。今日も女の子をいじめていた。叱ると大の字になって反抗した。文吉少年は今日も……』とね」

5 人に寄り添い、自然に寄り添う 持続可能社会

「江戸の心根である『共生・共助』は、人と人の間にのみ成立していた精神ではありません。自然と人との間においても成立していたんですよ」

上水道が巡らされていた江戸の町。近代化以前の諸外国が苦勞していたし尿処理に、自然との共生の精神が表れていると竹内さん。

「長屋には共同のトイレがありました。そこに貯められたし尿は、江戸近郊の農家が買い上げ、肥溜めで発酵させて畑にまく。そうして作られた農作物を江戸市民が食べる。

まさしく衛生的な循環型社会が完成していたんですね。し尿の所有者は大家ですが、し尿の売却益は結構高かったようです」

古着は何度も仕立て直して使い古し、やがてオムツや雑巾にする。古紙は回収して漉き返し、欠けた茶碗は焼き継ぎをし、灰は土壌改良材にする。江戸はものをとことん使い尽くして再生させる、持続可能な町だったのだ。

「最近ではサステナブルなんてカタカナ言葉を使うようですが、江戸の町こそ理想的な持続可能社会と言えるでしょう。大量生産、大量消費の便利さを知ってしまった我々が、そのまま江戸の暮らしに戻れるとは思いません。それでも、江戸の心根を学び、人と寄り添い、自然と寄り添い歩くことは可能だと思うんです」

抗いようのない大災害を経験している今だからこそ、生き方そのものを見直す必要がある。そのチャンスでもあるのだと、竹内さんは力強い言葉を寄せてくれた。



■ 日常に基づいた作品で学ぶ

竹内さんに日本文教出版の新しい美術の教科書をご覧いただいたところ、こんな感想を頂戴した。

「日常に基づいた美術品や工芸品が、多数紹介されているのはいいですね。生活と結びついたアートは、よそ事でなくなる。江戸で言えば浮世絵。美人画や役者絵は、今で言うプロマイドでした。日常的にそうした作品と触れ合うことで、日本人の感性が磨かれてきたのだと思います。この教科書で学ぶ生徒たちには、多様な作品に触れながら豊かな感受性をはぐくみ、自らの表現力を高めていってほしいですね」



上/伊藤若冲『鳥獸花木図屏風
(紙本着色・六曲一双のうち右隻)』
左/尾形光琳『八橋蒔絵螺鈿硯箱』(所蔵:東京国立博物館)
右/喜多川歌麿『寛政三美人』(所蔵:日本浮世絵博物館)